明治卅八年參月廿七日　朝鮮日報　（日刊）　（月曜日）　第四十六號　（三）

（明治三十八年…第三種郵便物認可）

朝鮮日報

紀元二千五百六十五年
韓國光武九年
陰曆甲辰年二月廿日

定價　一ケ月金…拾錢　…ケ月…
廣告　五號活字十九字詰　壹行壹日金拾三錢　三日以上金七錢　五日以上金五錢　長期同金…錢
發行兼編輯人　…
印刷人　…
發行所　韓國釜山港大廳町…番地　朝鮮日報社

論說　滿韓經營の一端

▼鐵的經營、算盤的經營▲
▼血肉の化身たる新鄕國▲

露國の滿韓經營は武力的なり軍隊的なり侵略的なり、今後我日本の滿韓經營は平和的なり經濟的なり殖產的なり、露國は鐵と砲とを以て經營を試みたり、日本は鐵と算盤とを以て經營を試みんと欲す。我日本は國防の必要を外にして其過多なる人口と經濟的運營の發展とは滿韓方面に新鄕國を發見せざるべからず、新鄕國の拓成は日本人の先驅によりて世界五州の同胞が均しく新世界の慶幸を享受すべきなり、而して新鄕國拓殖の事業は農業あり、鑛業あり、漁業あり、山林あり、工業あり、商業あり、貿易あり、而して滿韓の經濟界は此等の[illegible]、吾人は大体に於て一面は政府の戰局進行に伴ひて自由開放の方針を採るべく他の一面は國民の勇進邁往の精神を發すべきを忠告せざるべからず。

今や我が政府は戰局の發展に伴ふて滿韓の荊棘を開けり、國民は須らく其前程に急がざるべからず、政府は今や笛を吹けり、國民は躍らざるべからず、政府は喇叭の聲を傳へたり、國民は平和的進軍を試みざるべからず、我が同胞數万の骨を埋め血を灑ぎたる新鄕國は我國民の經濟的運營によりて新運命を開かざるべからず。

我國民の經濟的運營は約して貿易と移住の二者となすべし、貿易に於ては我經濟的競爭者獨逸あり、米國あり、吾人は劍と鐵砲に於て露國に勝ちたり、算盤に於て又た米獨に輸せざるべからず、商工及び農業に於ける移住に於て吾人は我國民に對し特に永住の精神を鼓吹せんと欲す、近時邦人の滿韓地方に渡來する多く酒保及び用達の類にして、一時暴利を收むるに急にして、時に永住的事業を經營せんとするものなきに非ずと雖も、其熱心と忍耐の足らざる一時の失敗によりて忽ち其初心を擲ち去り、其創業の[illegible]して之を繼承して[illegible]的事業を大成せしむる傾なしとせず、是れ吾人の最も惜む所、[illegible]する能はざる所、此の如きは畢竟邦人の永住的精神の薄弱により熱心と忍耐を持續する能はざるに因らずんばあらず、吾人は此故に切に邦人に對して永住的精神を鼓吹するの急務を認めずんばあらず、如今邦人は人間到る處に靑山ありと云ふに非ずや、新興國の新民人は何んぞ溫太の偏情を以て永遠の新鄕土を拓闢する大精神を鼓舞せざるや、滿韓の江山は笑つて新興國の人を歡迎せんと欲するを知らざるか、永住なる哉永住なる哉、吾人は我國民に對し滿韓永住の精神を以て鐵的經營、算盤的經營を試みんことを切に勸說して止む能はざる也。

雜報

●三嶋鹽田の概況
…釜山領事館の調査…

當釜山領事館內に於ては工業としては殆んど見るべきもののなし尤も東萊の細官、大邱の明紬、金泉の莚、慶州の紙等は朝鮮人間には著名のものと稱せらるるとも敢て採錄するに足らず唯た製鹽業のみは其方法幼稚なりとは雖へ蔚山灣內三嶋の鹽田、洛東江口の鳴湖鹽田とて全國有名高きを以て左に蔚山灣內三嶋鹽田の概況を記述せんに、蔚山灣の奧北西に位し蔚仙川の左岸にあるをはまぐり嶋大嶋鹽田と稱し右岸にあるを三嶋鹽田と稱す故に總稱して三嶋鹽田と云ふ、はまぐり嶋は製鹽釜數十三座鹽田三十七町余製鹽釜數二十七座鹽田三十四町余大嶋製鹽釜數三十三座鹽田六十九町余にして每年陰曆十二月より翌年二月迄六ケ月間を盛期とし四月より九月迄は農業多忙若しくは降雨の爲め作業は休業の姿にて其た盛ならず十座の製鹽度數は一ケ月晴天の際は拾四回を最上とし以下天候によりて多少增減ありとす

鹽田の構造は殆ち方形にして廣さ二反步乃至五六反步周圍に幅さ三尺深さ一尺の小溝を通じ海水を導き田面平坦にして其の如く而して田面凝聚ふよ沼井五を斷乃至の十ケ所を設く沼井は凹地に溝側又は小溝を築きたる粘点に設け高さ四尺乃至六尺鹽土を以て築き圓柱形をなし一方傾斜稍々緩にして縱に幅二尺の凹地を造る頂上は廣さ四尺乃至五尺縱三尺乃至四尺五尺次四尺を穿ち深さ一尺底は木枝及蘆幹を以て縱橫に編み其部よりより縱一尺の隧道を穿ち一方の凹地に通じ內部に芦幹を密着羅列す乃ち鹽土を頂上の凹地に盛り海水を汲注する時は濾過して鹹水を作り隧道を流し凹地に溜るの仕掛なり、製鹽場は蘆及松枝を以て圓形の圓壁を建設し直徑五間周圍十五間余一方に高さ六尺幅五尺の入口を設け天井は圓錐し中央釜竈は長さ二間半幅二間高二尺五寸鍋兩側は煉土を以て築き煮釜は煉土ぞ蠣灰の混和物とにして恰も漆喰の如き物を以て厚さ二寸深五寸を越へず上部兩側に八寸角の材木を縱に渡し其上に五寸角のもの十本を植へ此木材より無數のわら繩を垂れて釜底に竪立せる釣形の鐵釣を吊り以て釜底の墜落を防けり火口は兩側に設け高さ二尺七寸幅二尺五寸燃料の投入に自由ならしめ別に煙突の設なし燃料は枯松葉にして他に薪材を使用せず製鹽法は毎日早朝より作業に着手す其順序は鹽田を鋤きて四邊のか溝より海水を灌漑し其乾燥するを待て鹽土を採集し沼井の鹹水を汲採して製鹽場溜池に移し鹹水の供給充分さなれば煮釜に汲み込み點火の準備をなす大概一座に付人員六人を要し三人は鹽田に作業し三人製鹽場にありて火を焚き鹹水汲を交替に務む點火は早き時は午前十一時頃より遲きも午後三時頃迄に開始し燃料を絕へず竈內に投入し全部に火力の平均を保ち釜中の鹹水を煮沸す而して一人は圓形の瓢製長柄の汲子を以て溜池の鹹水を時々釜上の木樋より灌注ぎつゝ蒸發減退の量を補ふ煮沸時間は約二十四時間にして焚火夜を徹し同時刻に至りて全く水分を蒸發し了したるとき度とし燃料の投入を止め之を放置する事四五時間火氣衰へ口中漸く冷却するに及びて木製の集鹽器を以て結晶鹽塊を採集し鹽場に運搬す一座の製鹽高は一晝夜の製出高七十斤を普通とし多く製するときは七十五乃至八十斤に及ぶ事あり一瓜は蔚山枡三枡五合（我が二枡五合位）に當る營業組織は其規模小なるものは一座を所有し一家業で營業するもの大なるものは數個鹽屋と鹽田二十五六座を所有し經營に雇人を使役す一[illegible]四貫文乃至五貫（我が五拾五錢乃至七圓五十錢位）給料は各自支給す一家族組織に於ては年中作業するも他れ雇入使役者は夏秋農業に多忙の際は雇人等の多くは家に歸るを以て半ば休業の姿なりと云ふ

●一笑一話

黑溝臺逆襲の露大將グリッペンベルグは寡數の兵を以つて我が少數の兵に散々に擊破せられながら体面に關つてアノ戰爭は露軍の勝であつたのだなど、途方もない法螺を吹いて居る今度又々第二軍の司令官となつたのを幸ひ手痛く打擊して息の根を止めて呉れたいものである▲露國の御大將はドレもコレも皆失敗に終はつて仕舞つた▲クロパトキンは別として、スタルクがアノ通り、アレキセーフがアノ通り、ステッセルがアノ通り、ストアイドロフは一度も艦に乘らずに觸づて仕舞ひ、總大將のグランド公も[illegible]の体で逃げて歸つた、何れもニコラス大公もリネウイッチ將軍も皆失敗の外はない▲クロパトキンが本國に歸つた上は何れ反對派との軋轢が甚だしいであろう、流石のクロパトキンも遁んな戰爭に掛けては存外猛將であるかも知れぬ

實事物語　日探大尉（其五）
斗生

天女としか言ない

…よし乞食しても西比利亞を橫斷しやうとした大尉は無謀と言へば無謀大膽と言へば大膽の骨頂である斯く決心した大尉は愈々明日の期日に出發しやうとした時亦一つの故障が起つた夫れは日露の風雲は日々益々切迫して或る處では戒嚴令も布かれてある故に軍隊の警戒嚴しめる大尉をしてシベリヤを橫斷せしむるは危險であると思ふたのであらふイルクツクの警察は之を許さない、進退極まつた大尉は策の施すべき樣なく今は只イルクツクの警察に拘留の辱に遭ふべき余儀なきに至らんかと天を仰いで長嘆した此時不思議にも此危急を救ふた天女がある夫れは誰れであらふか大尉の目には天女としか目へない

果して透出せるか

イルクツクの監督に三ロン孃と言ふがあつた年未だ若けれども品行端正で夫れに容貌も花の如く別て目の涼しきは星の如くであつたから如何にも同情と慈愛の心を表して居るを甘ふので非常に評せんつれてあるツマリ孃は先天的の慈愛家で天の使命を帶ぶる淑女である此るに孃は大尉がイルクツクに來たる當時より其人と爲りを敬服して將來有爲の士と愛慕せられたらしい、夫も尤もであろふ大尉は敗徵靈々の士であつて万人の間に立つて一異采を放つてあるツマリ玉の如き態度は今やなく魁梧の偉丈夫で流石は三ロン孃早くも大尉を愛して度々往來してあつた今氏の體態を見ては平生の義俠心止み難く大尉を救出す事に努めた此時日露間は危機一髮の間に迫つた大尉は果して首尾よく逃出せるであろふか

小品文

●出鷗行
古子

◎余は汝に投す、余は汝の男子的一步を進めて云へば其の破壞的、一步を進めて云へば其の建創的、一步を進めて云へば其の勢力的、更に一步を進めて云へは其の剛勇邁往なる一大勢力にあらゆる贊辭を呈せんとす。

◎雲を破りて閃く紫電の東西に馳騁する處の如何に勇壯にして而て闇黑なる夜の吾世に毅然として鳴り渡る汝の活動の如何に無限の勢力を含めるぞや、

あゝ汝の性は其橫を蹂し、其の家を燒き、其人を殺し慘憺たる魔性にあり、余は汝の血腥的性格を愛す也、余は汝の殘忍にして酷薄、余は汝の好戰的、余は汝の壓伏專橫的態度を愛す也。

◎汝が其の偉大なる魔翼を登揮する時、あらゆる自然が聲を潜め、歌を含み、叫ばず動かず、慴伏と畏伏と而して戰慄の外なき光景の如何に憐れむべきの極にして如何に笑ふべきの限りぞや、故に汝に對抗の意ある者は悉く破壞し、悉く破碎し、悉く蹂躙し、悉く燒殺せよ、是れぞ汝の特性ぞや

◎さもあれば、今の世は此の大大魔王の出現、否此の大勢力者の出現を望むで已ますといふものあらば、われは雙手を擧げて之れに贊せんかな。

講談

仇討　武勇の譽（十九回）
竹林講演　本社　井[illegible]速記

かつ「さらかまア矢セヤア竹おまへもいつておくれ主從御籠に打乘りましたるを忽まち昇きましたのが豐尾郡阿久津川といふ名代の大川でございます忽まちおかつ女を引出すと見へたるが高手小手に縛しめやゑん響をはませました何事にや當人には登向分りませんか豐刀を引拔た小浪才藏が方は岩見と違いなし體や扱れに恥辱を與へたナ此の鍛に於て登すためしにいたすから覺悟に及べ身は消けど矣かつ女は習も物云ふことが出來ません小「竹……勝が岩見と密通もして居つたなどゝ云ふ事は必らず知つて居るだらう「何うだいたしましてソンナ事は知りませぬ小「默れ日々の評めしは知つて居るだらう有体にいへは助けてやる[illegible]竹「重太郎にあふ[illegible]い[illegible]ですに申せば[illegible]左樣でございますか[illegible]重太郎樣がうちわやへ泊つておいでなさる時之を持ていけとおつしやいまして御新造樣が包みを御渡しになりました何でございますか知りませんが大を…重臣つゝみでございますうつわやへ參りましたならば御存樣は谷社樣へ御參詣いすつて御歸りがないから受取るあとが出來ない持て歸れと申しましたから立戾つて御新造樣へ御渡し申しました妻しはお金の消入つておる包みだらうと思ひましたが何も別に怪しは知りません何うか御助け下さいまし小「イヤかつ重太郎を閑扇屋へ遣はし竹に金子を届けさしたる覺へはあるだらう……夫はコーーといひたれが捨辯をはまされて居ますからいひわけが出來ない實に怨の毒千萬おのれ憶くしてくれる覺悟しろョと小浪才藏はのしかゝつて貞烈近隣へきこえたる勝女を妓に斬殺しにいたしました殘つた下女のお竹を大勢の門弟で登寸だめしにして阿久津川へなげ込ました幸先よしと奧州路を攻節に進み白川の城下に來たつて夫より支度をいたしまして奧州路を南に向いて仙臺を指して向きました此時に小浪才藏は當主人行方弘より拜領いたしました紋附の衣類白たゝきうら金の陣笠至急に馬を求めまして用意して來た馬具を之につけ打跨がつて立派ナ武士となり門人どもは家來にいでたて小浪才藏改ため名にかへて蒲野彌兵衛高秀と名乘りまして仙臺の城下を來た[illegible]つて伊達上野介正[illegible]へ[illegible]高野彌兵衛高秀と名乘りまし[illegible]た行方家と申しますのは後[illegible]を致しました陸奧の國[illegible]撫深公の家でございます永らく[illegible]れました故行方の御所と申しまして[illegible]ございます早速伊達上野之助が對面をいたしますと口上の赴むきに家中の[illegible]重太郎と申すものが尾道帶刀の娘[illegible]通いたして尤とも玉緒儀は三枝多門なるものと幼年の頃より無二の仲なれば重太郎に帶刀が意見を加へましたる處ろ如何に思ひましたか或夜ひそかに重太郎三枝多門のもとへ罷り越し多門をはじめ大勢のものを切ちらし玉緒をつれて出奔をいたしました尤とも彼は若年と雖ども劍術の道に達し殊に大方容易ならさる英雄でございますたし御太家の數ほひを以て速やかに御召取り下しおかれてそれがしに御引渡しを願ひます拙者は旅館に相待やうに仕まつりさす夫につき念の爲め申し上げ置ますが重太郎儀は抗節の國に知る人多くあつて幼年の頃より彼の國へ罷り越し武術の修業いたして居ます故九州なまりがございます左樣御承知下まいますやうといふ書をて立戾りました。

朝鮮日報

雜報

門司特報（廿四日發）

特派員 鐵月生

井上兵團追擊戰

本日當地に後送せられたる某負傷將校は入追擊開始より十日奉天附近一帶占領に至る井上兵團の戰況を語る左の如し

本月七日午後に至る迄堅固なる防禦工事に據りて頑强に抵抗したる東勾一帶の敵兵も黑木軍右翼西島縱隊の前進に依りて其側背を脅威せられて防禦を繼續するあたはず七日夜間を利用して其防禦線を棄て退却すべく餘儀なくせられたるを以て我井上兵團は全隊競て總追擊に移る事となりし、蓋し其兵團は當時の隊形を云へば今村旅團右翼隊として山本平井の兩支隊之に屬し島村旅團は杉原、竹下の兩支隊を離して左翼たり爾かく行軍隊形に依り高潮の堤防を決壞するか如き勢を以て急追に次ぐに急追を以てせり、斯くて敵は我軍の偵知し能はざる位に匆々退却を爲したるもの如くで攫掠類は勿論各種の軍需品等を攜帶するの餘裕なく其大半を委棄したる事とて我軍が東勾山を占領し進んで進撃の途中其等の物資散亂し居たるを

支那人の一隊

が好機逸すべからずとして兜顆鑛の甘きに就くが如く群集し掠め得たる物品は支那婦人か監視の任に就き居たるは戰場の奇觀なりき

我軍の急追又急追約四時間最强行軍の有様にて疾風も啻ならざるの將卒は一時も早く敵軍に遭遇して彈丸の雨を浴びたるか却て幸福なりと思惟したる位ひ追窮に努めたるも遂に追及するあたはざりしは恰も是れ「疾星光低逸長蛇」の感ありしが八日の[illegible]は各隊は新高士屯附近一帶に戰鬪隊形の儘露營して敵万一の逆襲に備へ兵團本部は其後方爪房に露營する事となれり

翌九日は朝來大風あり黄塵濛々日猶夜の如く殆んど咫尺を辨ぜざりき[illegible]

我兩軍か鼻を突き合さん

[illegible]

健見團の猛擊

[illegible]

殘餘の將卒ハ白旗をあけ帽子をふつて我軍門に降服し

[illegible]

は實に千五百餘人の死傷者を生せしめたり

[illegible]

韓帝の聖心

[illegible]

第一銀行の業務

[illegible]

韓帝と岡部子爵

[illegible]

戰地と滿典

[illegible]

京釜鐵道の開通

[illegible]

釜山商況

[illegible]

仁川だより

[illegible]

朝鮮日報

小説 佛蘭西騎兵の花（[illegible]）

英國 コーナンドイル著
日本 梅村靈士譯

（銷魔の贈物）（終）

二人の眼に映じた物は何であつた。拾か三人の武官は二人の後に立つてゐた。五米突より遠からざる距離に。

其眞中のは余り丈高いと云ふ程ではないが先可なりとして宛も世良田大佐と全じ位である。其軍服は藍紗で白い羽毛の飾のある小さな山形の帽を被れてゐる、而しながら世良田には其服装は少しも眼に留らなかつた、只其の顔だ、其痩せた細長い鷹の如く曲りたる鼻と嚴威ある眼と其薄い唇が堅く閉つてゐる這は誰が眼にも其凡人でない事が解る彼は確かに百萬人中の一人であるのだ。

其眼の鋭は一つ〳〵にコプとなつて其眼光は恐ろしい光を以て彼月の顔に注いでゐる。其眼に彼月の搾つてゐる札は一枚〳〵ふ知覺を失つた其の手から落ちてゐるのであつた。

其他の一人は樫の木を刻んだ樣な顔で赤色の大きな軍服を着てゐるも、一人は中作りの精悍な容貌で濃い頬髯が生へてゐるのに金條の縫をとつて緑色の上衣を着てゐる。

三人の少し後ろには從卒が三頭の乘馬を率いて控へてゐる。亦其後には皇騎兵の一隊が馬の頭を並べて堂々と列を作つてゐるのである。

「ペイ倉澤あれは一體なんぞと云ふザマだらう。」

と眞中の人物は言つた。赤い軍服の人はあれを聞いたでせう森林嶺公は此處の有様は何うしたのだと御尋ねです。

皆侍む可き者月は事の經緯を明瞭に物語つた面しながら。磐石の如き人の顔は少しも和らぐ様子が無い。

「倉澤大將、それはさうとして軍隊の規律は守らなければならぬです、汝等に自分で出頭して軍法會議の處置を待つが好か」

世良田は爲戸が罪人となつて軍法會議の席に臨む可き言を聞れながら瞬け行くのを見て恐ろしく感じた、世良田は耐へず身を英國の將軍の下に投げて自分即ち世良田一雄が彼の波戸と云ふ士官が無罪なる良士官である事を證明して其特罪を謝したのであつた、世良田の如何なる[illegible]鐵石の心を溶かし[illegible]出來たので[illegible]良田[illegible]を浮べて[illegible]した而しながら彼の目には遂に一滴の淚ひをも見なかつた、世良田の驛は盡きた、彼は最早其次に育ふ事が出來ない。

「貴國の軍隊では輕騎兵一人の武装は總計幾貫目あるのか」

此が器械で作つた樣な英國武官の世良田の熟識なる質問に答ふる言葉であつた、斯くの如きものが佛蘭西人ならば世良田の頭の上で泣く可き憐れなる場合の答であつたのだ。

「二百十磅です」

と世良田は得むを止ず答へたが、奈林嶺は「充分重い荷だな」と云つて兵士に向ひ「此捕虜を護衛隊に渡れ」

此命令につれて龍騎兵の一隊は世良田を取り巻いた、世良田は殆んど狂人の如くなつて了つた、彼は陸軍が自分の監獄となつたのを厭はないので此時分は最早自由の身となつてゐる筈であつたから世良田は將軍の目の前に札を差附けて

「御覧なさい、私は私の身の自由の爲に賭博して勝つたのです、今御覧になる通り此處に王を持つてゐます」

と叫んだが此時ばかりは將軍の痩せたる顔に微かなる笑が浮んで、

「イヤ、私の方が勝つたです、御覧なさい反對に我國の王は今から貴下を持つのです」

と答へつゝ馬に跨り何處にか驅けて行つて了つた（了）

附記 是より世良田が英國にありて破獄を企つる處より西班牙の山賊征伐や那翁の末路に當りて此俠士官が勇壯なる働らきを爲す條は別に稿を更へて之を譯述すべし。（譯者識）

●新未亡人氣質

國家への御奉公名殘りなく散る櫻も物かはと口にも筆にも晴れの武者振よと褒められて勇しの討死を遂げられた夫、何の遺憾、何の不足があらうぞとは當今新出來の未亡人から聞く健氣な言葉で實以て涙の出る程有難い心がけであるけれども是れを私情より云へば何れの未亡人も年は若く殊には新婚早々の若後家も少なからねば何して其長い將來を慰められようかと云ふことは思遣るも深き人々の昨今心を痛めて居るところである處が此若き未亡人の續々殖えて來るのを奇貨として其淋み少ない心細いところにつけ入り巧みに之を玩弄ばうとする曲者がある而して其手段は[illegible]と云ふのが如何にも厭々しい近來[illegible]宅に妙な男が出入りするさうですがと訪ねるのが抑もの始まりで夫から段々大膽を向け二三の人から斯云ふおとも聞いたと云ふ全然で身に覺えの無い怪しからぬおとを云ひかけるのです。其處で其術ゝ突つて居ない未亡人は躍起となつて其不實を辨じ何か左様云ふ問違の世間に漏れぬ様にと哀願するけれども其處が曲者の思ふ壺であるから何と嚇しつけて終に破倫不徳のでせんと爲すのである現よ某氏の未亡人で端なく此畏に陥り恥かしいやら口惜しいやらで身を悶へて沈んで居るところを同家の雇人は御出なれとつけ入つて遂を仇の落花狼藉面して斯云ふ曲者の十中の八は其未亡人の知己友人であるとは見下げ果てたる人々ではあるまいか夫れにしても是等の未亡人が一旦操うと思ひ定めて佛壇の前で切つた黒髪時雨が來やうが暴力が來やうがそんな事に怯お催れて躁ぎらしい其頭に應一本でもつける樣では烈士の妻とは申されぬ乎

▽[illegible]△

●天然痘續發 一昨日又々左の者同病に感染し即時避病院へ收容されたるが同病の原因は水鉄食物等より發生する由なれば此際各自衛生に注意ありたきものなり

當港南濱拾九番地山口岩兵衛（六十）

●韓人漁船を拾ふ 昨の島石油倉庫向側居住の韓人某は一昨日漁船（長ヲ九尋）を拾得し警察署へ屆出でたるが心當りの者は驅け出らるべし

▽ヘロツトコ陣△

日軍の勇氣撰者擔腰なり
流軍の鐘ボツポと喘く鴉は逃げ
よく見れば逃げぬは腰の拔けた敵
膝外を包圍して戰び面白さ
奉天の露軍翻悸と改名し

讀者の煩悶



▲丙午の年に產れたる女の兒は男を喰ふといふ俗説がわるが來年は恰度本の丙午に相當すれば來年產れたる女の兒はサア恐るべき性格を備へるであろうと思つて出るものを出さぬといふ譯にもゆくまい（蛇女）▲龍頭山に對して龍尾山といふがなきは不思議（龍尾齋）▲當港の百宇文會近時何んぞ夫れ寄はざることの甚だしきや宮川兄健在なりや（千手文生）▲近頃毎夜のやうに二十三四歲の美人が海岸を散歩しながら實に消魂なる聲にて詩吟をやつて居るが那邊の風流美人にや其名其住家ありきかまほし（片田の齋庵坊）▲雷警の蔵る潑めしき宮崎に譲めてござる入宇舎の君は韓破樓明月のき一さんど最も〱深くなつて三日にあげず通つてござるがナさりとは[illegible]花の少なからぬに[illegible]韓妓に[illegible]ンとは物好きな誤人でござる[illegible]▲模範に倍りて龍頭山の[illegible]綠石煮々として[illegible]綠深く[illegible]心[illegible]を樂ましめざるはなし、誰[illegible]風致に[illegible]しと（本詩仙）

京釜鐵道 列車發着時間表 [illegible]

朝鮮日報月曜廣告

寫眞
平井寫眞館
釜山辨天町
各種撮影

筑前博多
醬油
釜山港南濱通
北海屋商店
(電話三百三十八番)

赤組の活動
赤組運送部
赤組旅客手荷運搬部
赤組便利部
赤組葬儀部
釜山幸町 赤組本部
草梁 全出張所

各種
半紙
ちり紙
唐津
水野漉商店

雜貨
陶器
釜山西町商港通
十字屋
小間物
建具

速成
旭日寫眞館

問屋
明治屋
釜山西町三丁目

獨逸直輸
アルコ

東京てんぷら
會席仕出し
御辨當
其外御注文次第
東京神田區雉子町ときわ本店
ときわ
釜山辨治屋町角

酒類
ビール
醬油
味噌
釜山本町
團野酒店
(電話四壹番)

洋服地各種
新調
着
陶洋服店
釜山本町

文具
吳服
雜貨
慈善商會

不變色寫眞
韓國風俗寫眞各種

釜山辨天町壹丁目
新堂

酒類之大王
酒界之魁

ホーニー
米國產紙卷煙草
新輸入
廣告
約一手販賣

精品廉價ハ本店ノ特色
靴
洋服
其他
雜貨
西川商店

雜貨

朝日ビールハ特別大勉強販賣
卷煙草刻煙草類
醬油類
其他なんでも大勉強取次仕候
大惠吳服店前(入ル幸町一丁目)
あつまや

Restaurant
小倉
電話一一五

釜山
大廳町
文珠堂

米國直輸入
ミルク
洋釘
林野商店
釜山港本町

精養軒の牛乳
滋養豊富
磯村牧場
精良無比

醸造元
口儀兵衛

名譽